

各関係機関団体の長
各病虫害防除員
農業資材販売等関係者 } 殿

福岡県病虫害防除所長

平成18年度病虫害発生予報第4号について

このことについて、病虫害発生予報第4号を発表したので送付します。

果樹カメムシ類の果樹園への飛来に注意しましょう！

今年のチャバネアオカメムシの越冬量は、過去10年間で見ると発生が多かった平成8年、16年、14年に次ぐ量ですが14年の半分以下であり、4～6月における果樹園への多飛来は見られていません。しかし、7月には活動が活発になり、果樹園への飛来が増加すると予想されるので早期発見に努め、発生に応じて防除しましょう。

8月には新成虫が出始めます。餌となるヒノキの球果を吸い尽くす8月中旬以降の果樹園への飛来に注意が必要です。

カメムシの飛来は、地域や園地により差が大きいため園内外をこまめに見回しましょう。



ヒノキ球果に寄生するチャバネアオカメムシ



ヒノキ球果の結実状況

< 予想される向こう1か月の天候 >

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候は以下のとおりです。

平年に比べ曇りや雨の日が多いでしょう。

気温は平年並でしょう。降水量は平年並か多く、日照時間は平年並か少ないでしょう。

週別の気温は、1週目は平年並が高く、2週目と3～4週目は平年並でしょう。

要素別確率

要素	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	30	40	30
降水量	20	40	40
日照時間	40	40	20

(福岡管区気象台 18年6月23日発表抜粋)

予報第4号

向こう1ヵ月間の主な病害虫の発生動向は、次のように予想されます。

作物名	病害虫名	発生現況	発生予報	
		(平年比)	(平年比)	(前年比)
普通期水稻	いもち病(葉いもち)	-	並	やや多
	ツマグロヨコバイ	並	並	並
	萎縮病	-	並	並
	ヒメトビウンカ	並	並	少
	縞葉枯病	-	多	並
	セジロウンカ	やや多	やや多	やや多
	トビイロウンカ	-	並	並
	コブノメイガ	-	並	並
カンキツ	黒点病	並	並	やや多
	ミカンハダニ	やや多	並	並
ナシ	ナシヒメシンクイ	並	やや多	並
ブドウ	べと病	少	並	やや多
カキ	炭疽病	やや少	やや少	やや多
	フジコナカイガラムシ	並	並	少
イチジク	アザミウマ類	並	並	やや少
果樹共通	カメムシ類	並	やや多	多
茶	炭疽病	少	やや少	やや多
	輪斑病	少	並	並
	カンザワハダニ	少	並	並
	チャノホソガ	少	少	少
	チャノコカクモンハマキ	やや多	やや多	並
	チャノミドリヒメヨコバイ	少	やや少	並
	チャノキイロアザミウマ	多	やや多	並
イチゴ (育苗期)	うどんこ病	並	並	やや多
	ハダニ類	やや多	やや多	並
アスパラガス	アザミウマ類	やや多	やや多	並

作物別発生予報

注：予報の根拠の末尾の（ ）書きは、（ + ）は発生を助長する要因、（ - ）は発生を抑制する要因、（ ± ）は発生の助長及び抑制に影響の少ない要因であることを示す。

【普通作物 - 普通期水稻】

1 いもち病（葉いもち）

（1）予報の内容

発生量：平年並、前年よりやや多い

（2）予報の根拠

ア 6月5半旬調査結果（ - ）

発病株率 0%（平年 0.8%、前年 0%）

イ 向こう1ヵ月の気象予報は、気温は平年並で、降水量は平年並か多である（ ± ）。

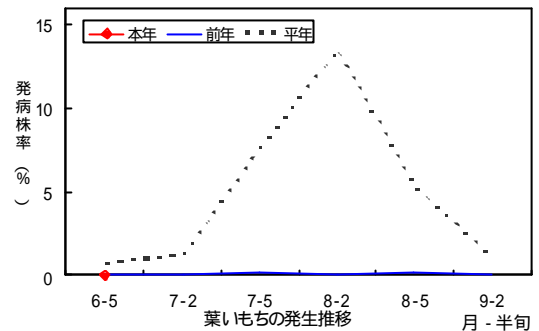
ウ 昨年は7月の気温は高く、降水量は少なかったため、発生が少なかった。

（3）防除上の注意

ア 補植用の置き苗は葉いもちの発生源になりやすいので、早めに処分する。

イ 発生に注意し、初期防除に努める。

ウ 防除薬剤は「平成18年度普通作病害虫・雑草防除の手引き」を参照する（以下の病害虫についても同様）。



2 ツマグロヨコバイ

（1）予報の内容

発生量：平年・前年並

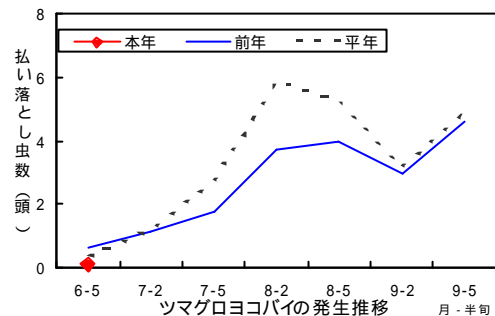
（2）予報の根拠

6月5半旬調査結果（ ± ）

10株当たり成幼虫数 0.1頭（平年 0.3頭、前年 0.6頭）

（3）防除上の注意

萎縮病の常発地を除き、防除の必要はない。



3 萎縮病

（1）予報の内容

発生量：平年・前年並

（2）予報の根拠

ア 6月5半旬調査結果（ - ）

発病株率 0%（平年 0%、前年 0%）

イ ツマグロヨコバイのイネ萎縮病ウイルス保毒虫率は0%（平年 0.2%、前年 0%）であった（詳細は平成18年度病害虫発生予報第2号参照）（ - ）。

4 ヒメトビウカ

（1）予報の内容

発生量：平年並、前年より少ない

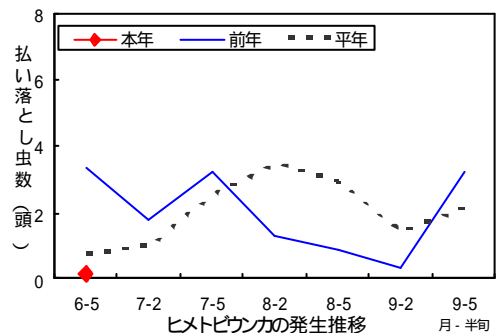
（2）予報の根拠

6月5半旬調査結果（ ± ）

10株当たり成幼虫数 0.2頭（平年 0.7頭、前年 3.4頭）

（3）防除上の注意

イネ縞葉枯病ウイルスの保毒虫率が高くなっているため、箱施薬剤を施用していないほ場で発生が多い場合は、防除を実施する。



5 縞葉枯病

(1) 予報の内容

発生量：平年より多く、前年並

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査結果(-)

発病株率 0% (平年 0%、前年 0%)

イ ヒメトビウンカ越冬世代の成幼虫のイネ縞葉枯病ウイルス保毒虫率は平年よりやや高かった(詳細は平成18年度病害虫発生予報第2号参照)(+)。

ウ 6月5半旬調査の結果、本田のヒメトビウンカ密度は平年並であった(±)。

(3) 防除上の注意

発病株を認めたら抜き取る。

6 セジロウンカ

(1) 予報の内容

ア 発生時期：平年・前年並

イ 発生量：平年・前年よりやや多い

(2) 予報の根拠

ア 6月4半旬以降、断続的に飛来を確認した(+)

イ 6月5半旬調査結果(+)

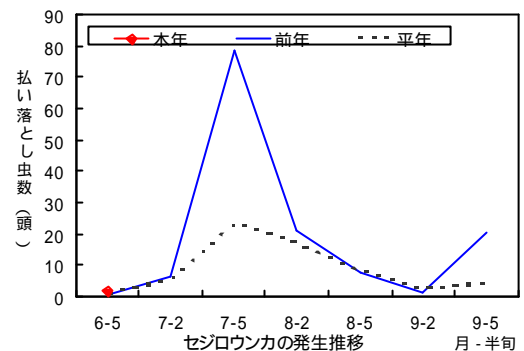
10株当たり成幼虫数 1.7頭(平年 0.7頭、前年 0.5頭)

ウ 向こう1ヵ月の気象予報は、気温は平年並である(±)。

(3) 防除上の注意

ア 今後も梅雨期間中は飛来があると考えられる。病害虫防除所のホームページに飛来状況及び発生パターン図を掲載するので参照する。

イ 要防除水準(飛来成虫数が株当たり6頭)を超える場合は、防除を実施する。



7 トビイロウンカ

(1) 予報の内容

ア 発生時期：平年・前年並

イ 発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 6月17日、19日に飛来を確認した(+)

イ 6月5半旬調査結果(±)

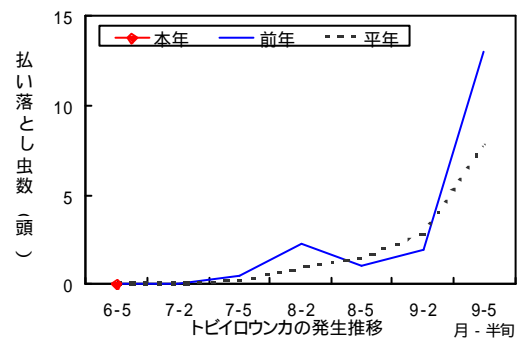
10株当たり成幼虫数 0頭(平年 0.0頭、前年 0頭)

ウ 向こう1ヵ月の気象予報は、気温は平年並である(±)。

(3) 防除上の注意

ア 病害虫防除所のホームページに飛来状況及び発生パターン図を掲載するので参照し、今後の飛来状況には十分注意する。

イ ほ場では集中分布をするので、ほ場全体を見て発生状況を的確に把握する。



8 コブノメイガ

(1) 予報の内容

ア 発生時期： 平年・前年並

イ 発生量： 平年・前年並

(2) 予報の根拠

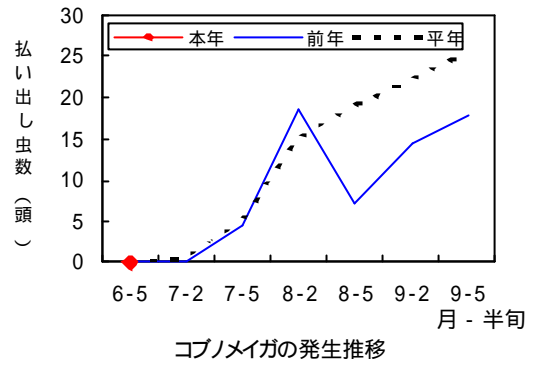
ア 6月5半旬調査結果(±)

30㎡当たり払い出し成虫数 0.4頭(平年 0頭、前年 0頭)

イ 向こう1ヵ月の気象予報は、気温は平年並である(±)。

(3) 防除上の注意

今後の飛来状況については、病害虫防除所のホームページに飛来状況及び発生パターン図を掲載するので参照する。



コブノメイガの発生推移

【普通作：その他の病害虫】

作物名 病害虫名	発生現況	発生予報		防除上注意すべき事項
	(平年比)	(平年比)	(前年比)	
早期水稲 セジロウンカ	やや多	やや多	-	<p>5月3日に初飛来を確認し(平年:5月24日、前年:4月27日)、5月の飛来量は平年より多かった。6月5半旬調査結果は、10株当たり払い落とし成虫数16.0頭(平年9.4頭、2003年3.2頭)、発生ほ場率100%(平年58.1%、2003年27.3%)であった。</p> <p>早期水稲におけるセジロウンカの発生推移 (10株当たり払い落とし虫数)</p> <p>今後の飛来状況については、病害虫防除所のホームページを参照する。</p>
トビイロウンカ	並	やや多	-	<p>4月30日に初飛来を確認した(平年:6月18日、前年:6月28日)。6月5半旬調査結果は、10株当たり払い落とし成虫数0.01頭(平年1.5頭、2003年0頭)、発生ほ場率12.5%(平年14.8%、2003年0%)であった。箱施薬剤を施用していないほ場が多いので、今後は発生状況に十分注意して、発生が多い場合は防除を実施する。</p>

【果樹】

1 カンキツ黒点病

(1) 予報の内容

発生量：平年並、前年よりやや多い

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査結果(±)

発病果率 0.2% (平年 0.2%、前年 0.2%)

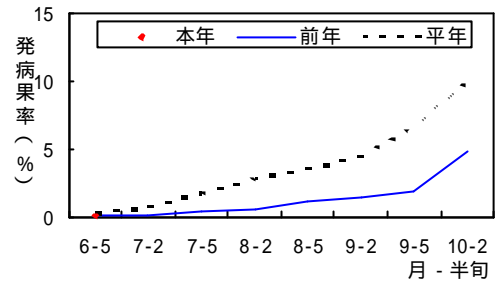
発生ほ場率 13.3% (平年 7.6%、前年 11.8%)

イ 向こう1ヵ月の気象予報は、気温は平年並で、降水量は平年並か多である(+)

(3) 防除上の注意

ア 枯れ枝は感染源となるので、発生が多い園では枯れ枝を除去する。

イ 降雨が続くと多発するので、積算降水量250mmを目安に降雨の合間をぬって薬剤散布を行う。



黒点病の発生推移

2 カンキツのミカンハダニ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査結果(+)

寄生葉率 33.8% (平年 17.3%、前年 46.2%)

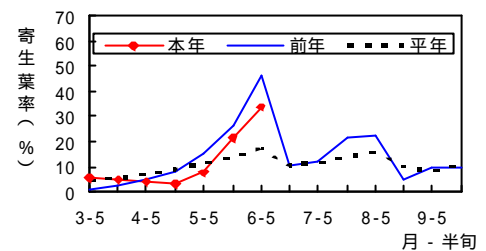
発生ほ場率 80.0% (平年 58.7%、前年 94.1%)

イ 向こう1ヵ月の気象予報は、気温は平年並で、降水量は平年並か多である(-)

(3) 防除上の注意

ア 薬剤防除は、薬液が葉裏に十分かかるよう丁寧に散布する。

イ 同一系統薬剤の連用は、薬剤感受性の低下を来す可能性があるため、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



ミカンハダニの発生推移

3 ナシのナシヒメシクイ

(1) 予報の内容

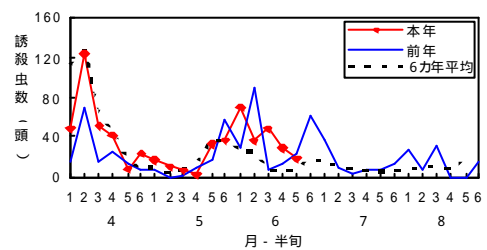
発生量：平年よりやや多く、前年並

(2) 予報の根拠

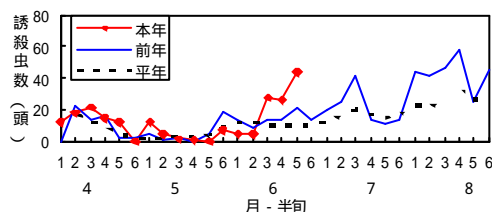
ア 第1世代成虫発生時期から6月5半旬までのフェロモントラップの誘殺数(±)

(県内3カ所の平均)

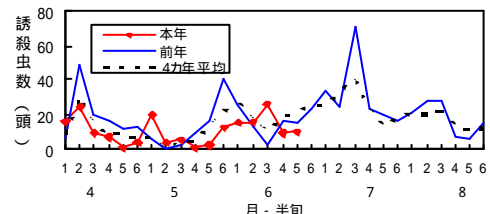
158頭(平年 127頭、前年 161頭)



フェロモントラップによる誘殺虫数の推移(朝倉市杷木)



フェロモントラップによる誘殺虫数の推移(黒木町)



フェロモントラップによる誘殺虫数の推移(筑後市和泉)

イ 向こう1ヵ月の気象予報は、気温は平年並で、降水量は平年並か多である(±)。

(3) 防除上の注意

- ア 第2世代成虫の発蛾最盛期は平坦地域で6月下旬～7月上旬、山間地域で7月上旬～中旬頃と予想されるので、発蛾最盛期直後を目安に防除を行う。なお、発蛾最盛期を過ぎても成虫が多く見られる場合は、更に7～10日後に追加防除を行う。
- イ 幼虫は主に果頂部から果実に食入加害するので、防除に当たっては、果実に薬液が十分かかるように散布する。
- ウ 被害果は処分し発生源を除去する。

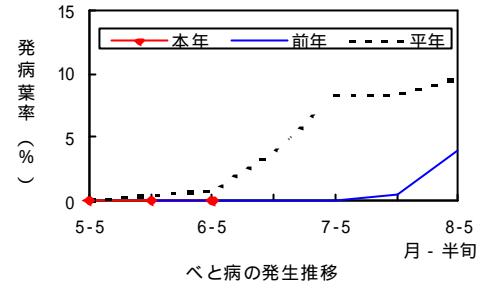
4 ブドウべと病

(1) 予報の内容

発病量：平年並、前年よりやや多い

(2) 予報の根拠

- ア 6月5半旬調査結果(-)
発病葉率 0% (平年 0.7%、前年 0%)
発生ほ場率 0% (平年 22.2%、前年 0%)
- イ 向こう1ヵ月の気象予報は、気温は平年並で、降水量は平年並か多である(+)



(3) 防除上の注意

- ア 発病後は防除効果が低いので予防散布を徹底する。
- イ 感染源となる罹病葉は除去する。
- ウ ボルドー液の散布は、降雨直後の雨滴や散布直後に降雨があると薬害が発生するので注意する。

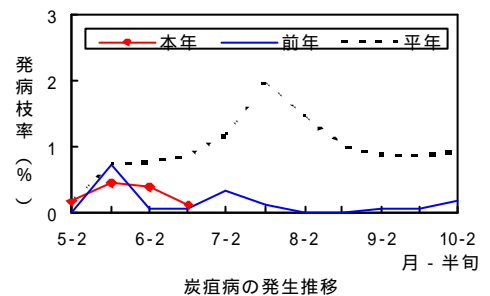
5 カキ炭疽病

(1) 予報の内容

発病量：平年よりやや少なく、前年よりやや多い

(2) 予報の根拠

- ア 6月5半旬調査結果(-)
発病枝率 0.1% (平年 0.9%、前年 0.1%)
発生ほ場率 5.9% (平年 29.3%、前年 6.3%)
発病果率 0% (平年 0.1%、前年 0%)
発生ほ場率 0% (平年 9.5%、前年 0%)
- イ 向こう1ヵ月の気象予報は、気温は平年並で、降水量は平年並か多である(+)



(3) 防除上の注意

- ア 罹病枝及び罹病果は、感染源になるので除去する。
- イ 降雨により感染が拡大するので、発病枝の多い園では薬剤防除を徹底する。
- ウ 樹冠内部の徒長枝に発病しやすいので、樹冠内部にも薬液が十分かかるよう丁寧に散布する。

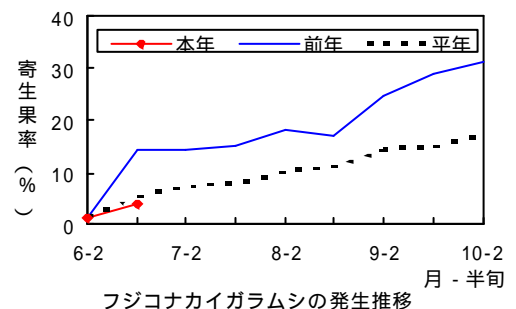
6 カキのフジコナカイガラムシ

(1) 予報の内容

発病量：平年並、前年より少ない

(2) 予報の根拠

- ア 6月5半旬調査結果(±)
寄生果率 3.8% (平年 5.3%、前年 14.3%)
発生ほ場率 64.7% (平年 55.3%、前年 75.0%)
- イ 向こう1ヵ月の気象予報は、気温は平年並で、降水量は平年並か多である(±)



(3) 防除上の注意

- ア 本年は生育ステージがやや遅れているので、第1世代幼虫対象の防除を実施していない園では早急を実施する。
- イ 薬剤防除は、ヘタの下や葉と重なった果実の表面などに薬剤がかかるよう丁寧に散布する。

7 イチジクのアザミウマ類

(1) 予報の内容

発生量：平年並、前年よりやや少ない

(2) 予報の根拠

- ア 6月1半旬から5半旬までの誘引剤の誘殺虫数(±)

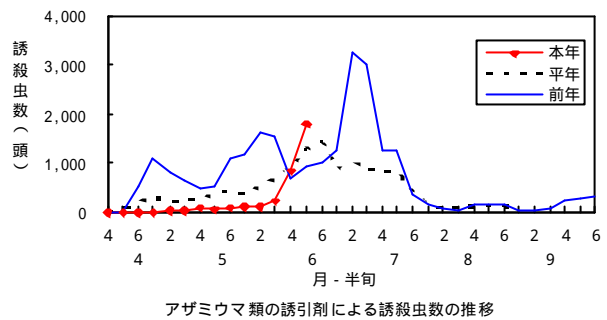
(調査地点：行橋市西泉)

612頭(平年 761頭、前年 1,195頭)

- イ 向こう1カ月の気象予報は、気温は平年並で、降水量は平年並か多である(±)。

(3) 防除上の注意

- ア 6～8月に開花する雑草が発生源となるので、園地周辺の畦畔等の草刈りを行う。
- イ 下位節で2.5～3cm大の幼果の開口部を逐次テーピングし、侵入を防止する。



アザミウマ類の誘引剤による誘殺虫数の推移

8 果樹共通のカメムシ類

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多く、前年より多く、前々年より少ない

(2) 予報の根拠

- ア 6月1半旬から6月5半旬までの予察灯の誘殺虫数(±)

(県内6か所の平均)

チャバネアオカメムシ 382頭(平年 863頭、前年 8頭、前々年 1,857頭)

ツヤアオカメムシ 156頭(平年 391頭、前年 3頭、前々年 870頭)

- イ 6月1半旬から6月5半旬までのフェロモントラップの誘殺虫数(±)

(調査地点：筑紫野市吉木)

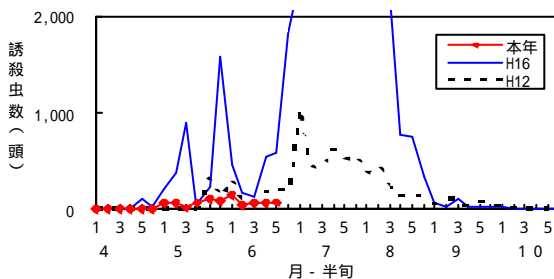
チャバネアオカメムシ 1,655頭(平年 4,836頭、前年 120頭、前々年 23,195頭)

ツヤアオカメムシ 86頭(平年 638頭、前年 1頭、前々年 500頭)

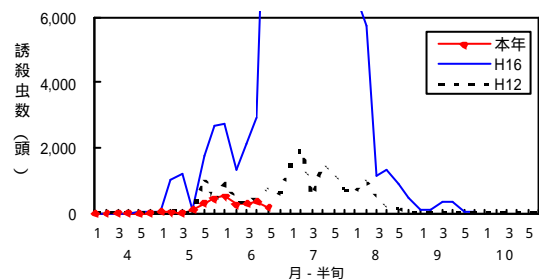
- ウ 6月5半旬のナシ調査結果(±)

被害果率 0.3%(平年 0.3%、前年 0%)

- エ 向こう1カ月の気象予報は、気温は平年並で、降水量は平年並か多である(±)。



予察灯におけるチャバネアオカメムシの誘殺虫数の推移 (県内6か所平均)



集合フェロモンにおけるチャバネアオカメムシの誘殺虫数の推移 (筑紫野市)

(3) 防除上の注意

- ア 7月には更に活動が活発となり、これから果樹園への飛来が増加すると予想されるので園内の発生状況の把握に努め、発生に応じて防除を行う。
- イ 防除薬剤は作物によって使用できる薬剤が異なるので注意する。

【果樹：その他の病害虫】

作物名 病害虫名	発生現況 (平年比)	発生予報		防除上注意すべき事項等
		(平年比)	(前年比)	
ナシ ハダニ類	並	並	少	
カキ うどんこ病 ハマキムシ類	少 並	少 並	並 やや多	

【茶】

1 炭疽病

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少なく、前年よりやや多い

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査結果(±)

発病葉数 0葉(平年 0.4葉、前年 0葉)

発生ほ場率 0%(前年 0%)

イ 向こう1ヵ月の気象予報は、気温は平年並で、

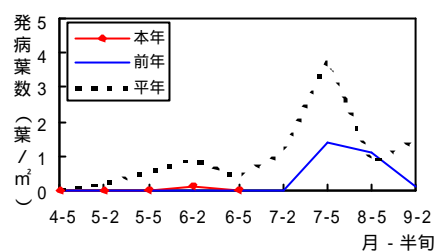
降水量は平年並か多である(+)

(3) 防除上の注意

ア 摘採残葉での発生に注意し、萌芽から1葉期までに薬剤防除を行う。特に最終摘採後の新芽の防除は、翌年の一番茶の品質・収量に大きく影響するため、防除を徹底する。

イ 雨滴により胞子が飛散するので、防除は降雨前が効果が高い。

ウ 同一系統薬剤の連用は、薬剤感受性の低下を来す可能性があるため、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



炭疽病の発生推移

2 輪斑病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査結果(±)

発病葉数 0葉(平年 0.03葉、前年 0葉)

発生ほ場率 0%(前年 0%)

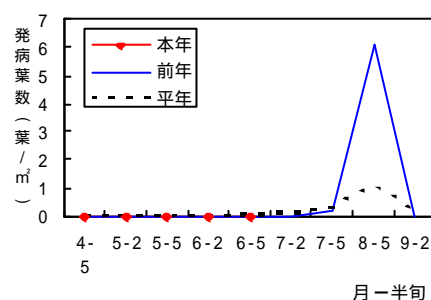
イ 向こう1ヵ月の気象予報は、気温は平年並で、

降水量は平年並か多である(+)

(3) 防除上の注意

ア 葉や茎の傷口から病原菌が侵入感染するため、薬剤防除は三番茶摘採又は刈落とし当日か翌日に行う。

イ 本病の発生園では、新梢枯死症も発生しやすいので注意する。



輪斑病の発生推移

3 カンザワハダニ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査結果 (-)

寄生葉率 0.9%(平年 6.8%、前年 28.8%)

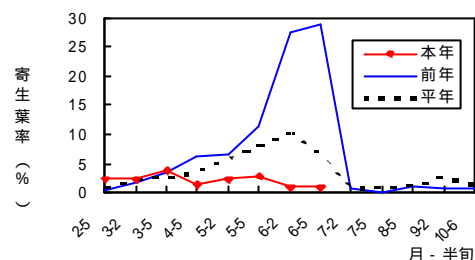
50葉当たり虫数0.7頭(平年 23.1頭、前年138.4頭)

発生ほ場率 26.1%(前年 69.2%)

イ 向こう1ヵ月の気象予報は、気温は平年並で、降水量は平年並か多である(±)。

(3) 防除上の注意

発生状況をよく観察し、寄生葉率が2%以上である場合は防除を行う。



カンザワハダニの発生推移

4 チャノホソガ

(1) 予報の内容

発生時期：平年・前年並

発生量：平年・前年より少ない

(2) 予報の根拠

ア 越冬世代成虫の発蛾最盛期は、4月2半旬で、平年並。

イ 6月5半旬調査結果(±)

被害葉数 1.1葉(平年 1.5葉、前年 0.2葉)

発生ほ場率 26.1%(前年 4.5%)

ウ 6月5半旬までのフェロモントラップの誘殺虫数(-)

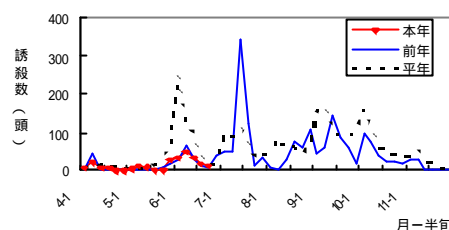
調査地点：黒木町 237頭(平年 708頭、前年 217頭)

エ 向こう1ヵ月の気象予報は、気温は平年並で、降水量は平年並か多である(±)。

(3) 防除上の注意

ア 第2世代成虫の発蛾最盛期は、7月中旬から下旬と予想されるので、成虫の発生に注意し、発蛾最盛期の7日後を目安に防除を行う。

イ 巻葉後は防除効果が劣るため、巻葉が散見されたら直ちに防除を行う。



フェロモントラップによるチャノホソガの誘殺数 (黒木町)

5 チャノコカクモンハマキ

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多く、前年並

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査結果(±)

被害葉数 0葉(平年 0.04葉、前年 0葉)

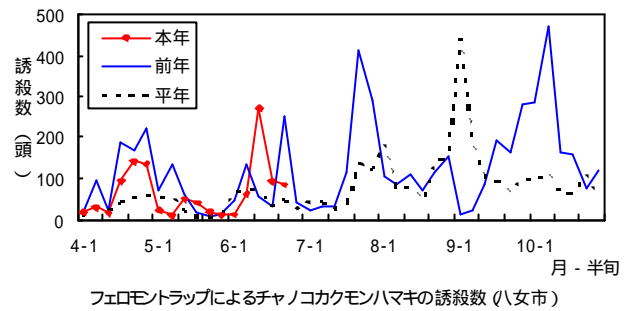
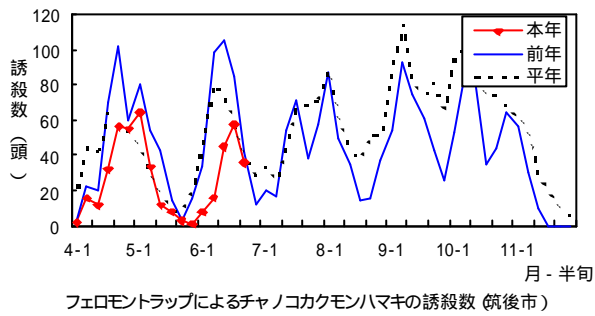
発生ほ場率 0%(前年 0%)

イ 6月1半旬から6月5半旬までのフェロモントラップの誘殺虫数(+)

調査地点：筑後市 162頭(平年 296頭、前年 364頭)

八女市 533頭(平年 296頭、前年 533頭)

ウ 向こう1ヵ月の気象予報は、気温は平年並で、降水量は平年並か多である(±)。



(3) 防除上の注意

- ア 第2世代成虫の発蛾最盛期は、7月下旬から8月上旬と予想されるので、成虫の発生に注意し、発蛾最盛期の7日後を目安に防除を行う。
- イ 巻葉後は防除効果が劣るため、巻葉が見られたら直ちに防除を行う。

6 チャノミドリヒメヨコバイ

(1) 予報の内容

発生量： 平年よりやや少なく、前年並

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査結果(-)

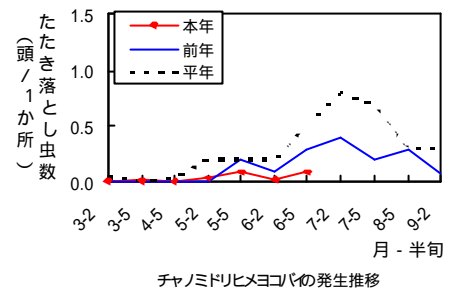
たたき落とし虫数0.1頭(平年 0.5頭、前年 0.3頭)

発生ほ場率 26.1%(前年13.6%)

イ 向こう1カ月の気象予報は、気温は平年並で、降水量は平年並か多である(±)。

(3) 防除上の注意

たたき落とし(A4版白紙上)で4頭以上発生している場合は防除を行う。



7 チャノキイロアザミウマ

(1) 予報の内容

発生量： 平年よりやや多く、前年並

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査結果(+)

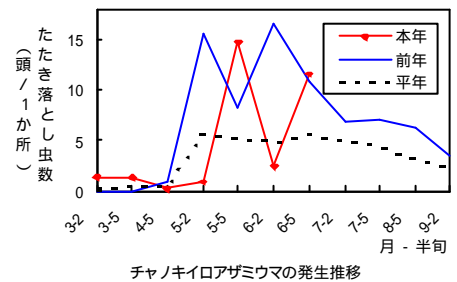
たたき落とし虫数11.6頭(平年 5.5頭、前年10.8頭)

発生ほ場率 100%(前年95.4%)

イ 向こう1カ月の気象予報では、気温は平年並で、降水量は平年並か多である(±)。

(3) 防除上の注意

たたき落とし(A4版白紙上)で10頭以上発生している場合は防除を行う。



【野菜】

1 イチゴ(育苗期)のうどんこ病

(1) 予報の内容

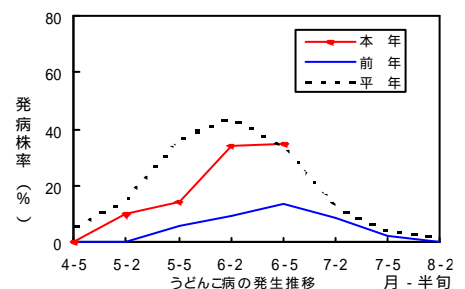
発生量： 平年並、前年よりやや多い

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査結果(+)

発病株率 34.8%(平年 33.6%、前年 13.3%)

イ 向こう1カ月の気象予報は、気温は平年並で、降水量は平年並か多である(+)



(3) 防除上の注意

- ア 「あまおう」は、前年、前々年までの「とよのか」に比べて発生は少ない傾向であったが、今年が多いので注意する。
- イ ほ場の排水をよくする。
- ウ 罹病組織の菌糸や分生胞子は、夏期には高温のため活動を停止し病徴はなくなるが、秋になると活動を始める。そのため、古葉の除去と薬剤防除を徹底する。
- エ 早期作型は夜冷短日や低温暗黒などの処理を行うため、本病菌の越冬を助長するおそれがあり、処理期間とその前後の防除を特に徹底する。

2 イチゴ(育苗期)のハダニ類

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多く、前年並

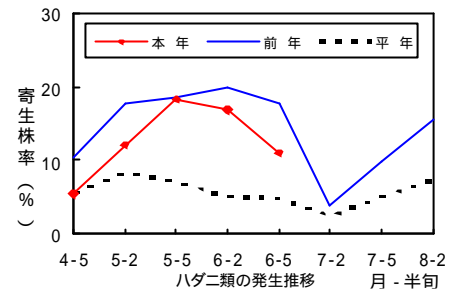
(2) 予報の根拠

6月5半旬調査結果(+)

発病株率 11.1%(平年 4.8%、前年 17.9%)

(3) 防除上の注意

- ア 多発生後は防除が困難になるので、発生状況に十分注意し、初期防除を徹底する。
- イ ハダニは摘葉した葉から急速に移動するので、ほ場内に放置せず、ビニル袋等に入れ密封して処分する。
- ウ ほ場内や周辺の除草を徹底する。



3 アスパラガスのアザミウマ類

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多く、前年並

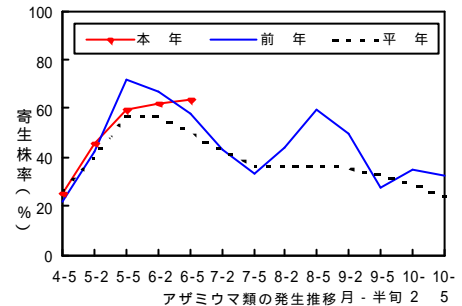
(2) 予報の根拠

6月5半旬調査結果(+)

発病株率 63.3%(平年 50.3%、前年 58.3%)

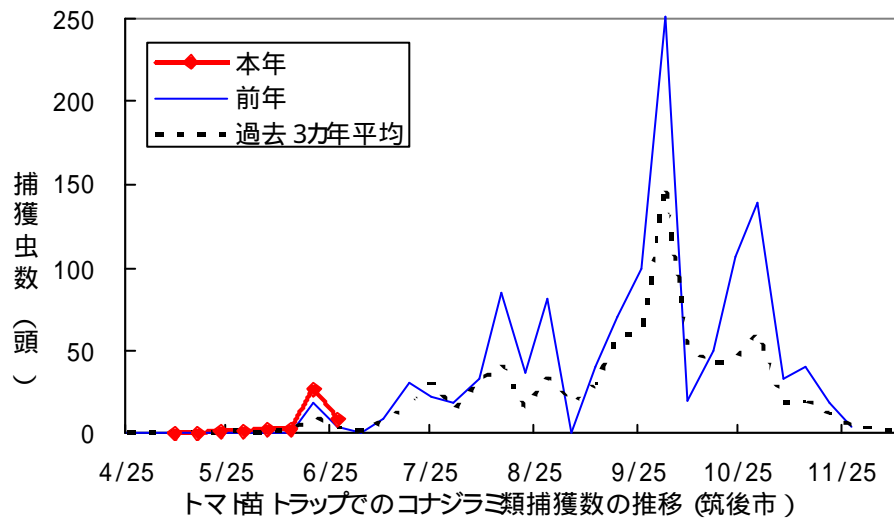
(3) 防除上の注意

- ア 成茎の擬葉を手で払い、落下した虫数で発生状況を確認する(白い紙などで受けると見やすい)。
- イ 多発生後は防除が困難となるので、初期防除を徹底する。
- ウ 施設開口部への防虫ネット設置や紫外線カットフィルムの被覆により、害虫の侵入を防ぐ。
- エ ほ場内や周辺の除草を徹底する。



【野菜：その他の病害虫】

作物名 病害虫名	発生現況 (平年比)	発生予報		防除上注意すべき事項等
		(平年比)	(前年比)	
イチゴ 炭疽病	並	並	並	地域により多発している。 発病株は速やかに除去し、防除を徹底する。
ネギ シロイハナヒヨドリ	並	並	並	
アスパラガス 斑点病	少	並	並	斑点病、茎枯病の初期発生がみられるので、防除を徹底する。
ハダニ類	並	並	並	
アブラムシ類	やや少	やや少	やや少	
鱗翅目	並	並	並	
野菜共通 コナジラミ類	並	並	並	平年値は過去3カ年の平均値。 野外に設置したトマト苗トラップによる捕獲数の推移は下図のとおり。 今後の発生状況については、病害虫防除所のホームページを参照する。



ポジティブリスト制度が5月29日より施行

- 農薬の適正使用、飛散防止の徹底を！ -

全ての農薬の残留基準が作物毎に設定され基準値を超えた場合は食品（農産物）の販売等が禁止されます。

農薬の使用に当たっては、農薬の使用基準を厳守するとともに周辺の作物に飛散（ドリフト）しないよう、これまで以上に注意を払う必要があります。

1 農薬適正使用の徹底

適用作物、使用量、濃度、使用時期、使用回数の使用基準を遵守する。

動力噴霧器、薬液タンクなどの散布器具を十分に洗浄する。

他作物が隣接している場合は、なるべく双方に登録がある農薬を使用する。

2 飛散防止対策の徹底

風、散布方向、散布時間、散布圧などに留意する。

飛散しにくい農薬（剤型）や飛散が少ないドリフトレスノズルを使用する。

散布ほ場周辺の収穫前の作物には十分注意する。

3 生産履歴の記帳

農薬使用の際は、作物、ほ場毎、散布月日、薬剤名、使用濃度、散布量等を記帳する。

病害虫防除所では、病害虫の発生状況と防除についてホームページでお知らせしています。

ホームページ <http://www.jppn.ne.jp/fukuoka>
電子メール kfok0301@sp.jppn.ne.jp